「みたいなの」

演者

カ カブスカウト 松田

サ サッカークラブの人 橋本

カ 「はい〜。カブスカウトのカブちゃんです」

サ 「こんにちは〜。サッカークラブのさっちゃんです」

カ 「さっちゃんってかわいい名前がいいね」

サ 「なんやねん頭から。人前でそんなに誉（ほ）めて。なんか、てれくさいなあ」

カ 「(歌う) さっちゃんはね。さちこと言うんだ。あつ、ぜんぜんちがつてるわ。

君（きみ）はサッカー君（くん）だったね。あぁびっくりしたわ」

サ 「こっちがびっくりするわ」

カ 「そうになると、実は、さっちゃんって、あんまりかわいいなまえでなくなるよ」

サ 「なんでそうなるかな。さっちゃんってかわいいなまえでしょう」

カ 「だからこんらんするんですよね。

(歌う) さっちゃんはね。サッカーく〜んと・・・へんだわ」

サ 「なにを一人芝居（ひとりしばい）してるんですか。劇団（げきだん）ひとりの親戚（しんせき）ですか」

カ 「いやいや、そんな人は知りませんが。顔が似てますか？」

サ 「顔のことを言っているのではありません」

カ 「それにさっちゃんって、女の子ですよ。君（きみ）はどうみても女の子ですか？」

サ 「もちろん、このとおりに見たままですよ」

カ 「ああ、やっぱり女の子に見えるわ」

サ 「見えへんよ。僕は男でしょう。・・・どう見たら、女の子に見えますか」

カ 「でもねえ、君（きみ）は女の子でないといけないんですよ。そうでないと、ちょっと困ることになるんですよ」

サ 「でもねえ、それはゆずれませんね」

カ 「そこをなんとか。頭にリボンを結ぶということで」

サ 「そんなんで女の子になるの」

カ 「顔に化粧をすれば、りっぱな女の子になります」

サ 「気持ち悪いわ」

カ 「でもねえ、さっちゃんは女の子なんですよ。だから、こまりますねえ、うん、間違

いなくこまる。っと」

サ 「っと。ってなんですか」

カ 「こまるっと」

サ 「あの、・・あのう、さっちゃんというのが、さきに生まれて、僕があとでつけられたの？みたいな〜。気がしますが」

カ 「そうだったんですか。それで、男の子になったというわけですか。よくわかりましたよ」

サ 「なんか、へんな気持ちですねえ」

カ 「じゃあ、さっちゃんかわいい名前ということにしておきましょう」

サ 「ちっともうれしくもないわ。さっきから、何をひとりでごちゃごちゃ言ってるんですか。何か悪いものでも食べたのですか？」

カ 「いやあ、食べた食べた。おいしかったですよ。昨日ね、カブ隊の活動があつてね。食べた、のしかったよ」

サ 「何？ また変なこと言い出しましたね」

カ 「食べた、のしかったよ」

サ 「何か一つぬけていませんか。もっぺん言ってみてください」

カ 「食べた、のしかったよ」

サ 「はは〜ん。食べたことと楽しかったことを一緒に言ってるよね」

カ 「あっ、失礼しました。ちょっと重ねてしまったんですよ」

サ 「はあ？ なにを重ねたのですか？ 意味不明です」

カ 「わからなかった？ ごめんね。たの字が一つ足らなかったものだから、どうにも困りました」

サ 「たの字は追加したらいいじゃないですか」

カ 「そうはいかないんですよ」

サ 「それで、食べたのしかったというのは、たの字が3つあります。でも、一つたの字がぬけてしまったのですか。うーん、何を言っているのかついていけない（くびをよこに振る）。・・・みたいなあ」

カ 「いや、たの字が4ついるものですから、そうでしょ、わかりますね」

サ 「(ゆっくり言う) あのう、わかりませんがあ・・みたいな〜」

カ 「結局(けっきょく)ですね。たの字をいろいろなところをお願いしたのですが、一つ足りなかったということなんですよ」

サ 「たの字をどこかに買いに行くというみたいなことをされているのですね。たいへんですね。みたいな〜」

カ 「いや買うということではなくて、つまりそろわないものですから、いろいろまわりを見渡して、当(あ)たりをつけて頼(たの)んでいるんです。(大きな声で) た

の字ありませんかあ。たの字ありませんかあ」

サ 「カブ隊の活動（かつどう）で借り物競争（かりものきょうそう）をしていた。みたいな〜」

カ 「そう、そう、それに近いですか。そうなんです。（握手する）ありがとうございます。わかってもらってうれしいです」

サ 「ええ〜、ぜんぜんわかっていませんよ」

カ 「そうですか。すみません。早い話が」

サ 「早くなくてもいいんです。できるだけ、わかるようにお願いします」

カ 「じゃあ、わかるように。たべた、のしかったの説明をします。まず『食べた』の中に『た』が二つありますね」

サ 「たとべとたで『た』という文字が二つあります。わかりますよ。2つ確保しました。」

カ 「つぎは、『のしかった』しかなかったんですよ」

サ 「はい？、『のしかった』？ なんでしょう。とりあえず、はい、続けてください」

カ 「のしかったというのは、意味がわからないでしょう」

サ 「そんな言葉（ことば）は聞いたことがありませんよ。よくそんなことをいいましたね」

カ 「ここに、（口でたの形をして、声にださない）『 』がないものですから。相手に気持ちが伝わらないのですよ。『 』のしかった。と言いたいんです。でも、『 』がない。くやしいなあ。ああ、意味が伝わらないなあ。で、そこで思い出してください。『食べた』に『た』があるでしょう。この最後の『た』を使おうじゃないですか。」

サ 「落語みないな話ですね。勝手に自分で使ってください。えらい難しいこと考えているなあ。緊張するわ」

カ 「『食べた』の『た』の字をちょっと苦しいですが、」

サ 「苦しい、苦しい」

カ 「もう少しです。がまんしてください」

サ 「早くお願いします」

カ 「たの字をぐっ〜とひっぱって、『うう、ヨイショウ！』『 のしかった』に重ねて使うことで、やっと『たのしかった』にできたんですよ」

サ 「おめでとう。はあはあ、やったね」

カ 「ありがとうございます。きみがなんで苦しいの？」

サ 「協力しないと」

カ 「美しい協調精神（きょうちょうせいしん）」

サ 「食べたことと楽しかったことを言うのに、『た』の字が一つたりなかったから、終わりのたと初めのたを重ねて、『たべたとたのしかった』と。ああ、苦労されまし

たね」

カ 「ありがとうございます。皆さんの応援のおかげです。これからも頑張ります」

サ 「それは、野球のヒーローインタビューとちがうか」

カ 「なかなかヒーローになれなくて」

サ 「あほくさ。いちいち文字を借りにいったら、話なんかできませんわ」

カ 「次は、カブ隊で食べたものを説明しましょうか」

サ 「楽しかったことかい」

カ 「楽しかった。楽しかった」

サ 「自分では、そう言っているつもりなんだよね」

カ 「おいしかったよ」

サ 「自分だけ幸せそうですね。ちょっと、ちょっと、口あけてみてください」

カ 「(横をみて) あ〜ん。ちょっと恥ずかしいですよ。これぐらい？」

サ 「まだ、見えません」

カ 「何か見えますかね」

サ 「もうちょっとですよ。はい、大きくあけて」

カ 「あ〜ん」

サ 「あ、見つけた。ありましたよ」

カ 「なにがあったの？」

サ 「たの字が一つ奥歯にひっかっているわ。それとってみて」

カ 「なにかさっきから、痛いんだよね」

サ 「やっぱり、たの字がひっかかっているんだよ」

カ 「お、とれた。」

サ 「もう一度言ってみて」

カ 「食べた、楽しかったよ」

サ 「よく聞こえたよ」